



Clown, Crown

ENSEMBLE STARS!!
Tsuoku Selection

CHECKMATE

ENSEMBLE STARS!!

CHECKMATE



Written by HHH



王子さまになりたい、と言ったあの子を鼻で笑いました。

——何て子供っぽい空想！

あまりにも馬鹿馬鹿しくて可笑しくて笑いが止まらなくて、涙まで溢れてきて、お腹を抱えて転げ回る僕をあの子は手にした棒きれでピシバシ叩きました。

理不尽な暴力！

馬鹿を馬鹿にして何がいけないのでしょうか？

「馬鹿じゃない！ 馬鹿にすんなあ！ ボクは馬鹿じゃないもん！」

こちらとは逆に怒りのために涙を溢れさせて、当時は僕よりほんのすこしだけ背が高かったあの子は猿みたいに顔を真っ赤にして暴れ回りました。

やれやれ。子供ですね。

あなたも高貴な身分なら、自分の感情を制御するすべを学ぶべきですよ。

「司も自分の感情を制御できてないじゃん！ 笑い転げてるじゃんつ、もおおお！」

怒りすぎて逆に笑えてきたのか、僕に馬乗りになつて制裁をくわえていたあの子は——

姫宮桃李くんは唇を妙なかたちに歪ませていました。

胎児のような色の髪。

たつぷり愛されて育ったものにしか与えられない、ひとつの染みも汚れもない屈託のない可愛らしい顔貌。

道化師そのものの、おどけているのか嘆いているのかわからない表情。

そんな顔をされては、こちらもどういう表情を浮かべていいのかわからなくなります。

「……うちの妹がね」

何だか微妙な空気が流れるなか、桃李くんは独り言みたいにぼやいていました。

「お姫さまになりたいんだって」

無理でしょう。と、僕はその愚かな物言いをまた鼻で笑います。

武門の家柄である我ら朱桜なら、時代が時代ならばその直系の子孫は君主や姫などと呼ばれていたかもしれませんが。

桃李くんのおうちは近年、成り上がっただけの、どこの馬の骨かもわからぬ血筋で――

「馬の骨？　そういう難しいだけで意味不明な言葉、どこでお勉強してるの？」

今は馬はおまえだよ、と当時はいじめっこ気質のあつた桃李くんはこちらに馬乗りになつたまま手綱を引くような仕草をしていました。やめてください。

「そういう現実がどうこうみたいな話じゃなくてね、もつとこう、何だろう、絵本の話？
ふわふわした感じの話で、べつに妹も本気で言ってるんじゃないんだろうけど」

桃李くんの妹さん、桃李くんがちがつてわりと現実的な子だと思っていたのですが。

「それでも子供で、女の子だもん、絵本のなかみみたいなキラキラした生活に憧れるんじゃないの」

あなたたちは充分以上に、庶民が憧れるような生活をしていると思いますけど。

悔しいことに、我ら朱桜よりずうっと。

「だからさ、現実の話じゃないの」

桃李くんは自分でもよくわかかってないのか、口をもごもごさせて語ります。

「もつとこう、夢みたいな話。妹は、ううんボクたち姫宮はたしかにみんなに羨ましがられる生活してるよ。司だつて羨ましいんでしょ、ボクたちのこと」

笑われたぶん笑つてやる、と言いたげに桃李くんは嘲笑を浮かべます。

「でもね。むしろね、現実になんかふうに満足してるから、夢を見ちゃうんだよ。もつともつと欲しくなつて、現実以外のところも探し始めちゃう」

桃李くんは、自分のことのように妹さんのことを語ります。

あまり自分自身と区別が付いていないのかも。よく似たご兄妹ですから。

「だから妹は、絵本のお姫さまに憧れたんじゃないかな。身分とか資産とかの話じゃないよ。何かこう、そう、ろまんちつくな話なの」

桃李くんは偉そうに語ります。

「金銀財宝や良い暮らしを求めてるわけじゃないの。妹が言ってたよ、たまに窓の外からすてきな男のひとが忍んできてくれるような、絵本でよくあるようなことを空想するって。そうしてお姫さまは男に手を引かれて、自由に、愛に生きる——」

いつものように、物知りぶって賢しげに。

「そんなの現実的に考えたらあれだよ、不法侵入の誘拐犯だけど、そういう子供っぽい恋愛とかの空想をよくしちやうんだって」

それでも、たつぷりの愛情をこめて。

「ボクは恋とかわからないけど、ぜったい妹を否定しないって決めてるの。ボクとよく似たあの子は、たまたま女の子として生まれたもうひとりのボクだから」

そうしてお姫さまに憧れた妹さんと同じように、桃李くんは絵本で描かれるような王子さまに憧れたわけですか。

「べつに憧れてないけど、よくわかんないなりに妹の真似っこしてるだけ。妹だけが、ボクが持つてないものを持つてるのって嫌だもん、ずるいもん」

桃李くんはそれこそ酷く羨ましがるみたいに、遙かな空を見上げていました。

「それに。妹がお姫さまなら、当然、ボクは王子さまでしょ？」

だから、桃李くんは急に王子さまになりたいとか言い始めたわけですか。

迷惑なんですけど。王子さまになるための特訓をする、とか言つて棒きれを振り回して襲いかかってくるし。

「良いでしょ、パパたちの用事が済むのを待つてる間は暇なんだから」

ここは朱桜のお屋敷。僕のおうちの、いつでも綺麗に整えられたお庭です。

今日は我ら朱桜と彼ら姫宮の当主たち——我らの両親が、いろいろ土地がどうかという難しい話をしています。

そんな親にくつついてきた桃李くんは、当然のように『お友達の司くと遊んでなさい』という無理解そのものの指示をされ、僕にこうして鬱陶しく絡んでくるわけです。

べつに友達じゃないのに。

たまたま近い立場に生まれた、同い年の男の子というだけなのに。

「だから、ボクとおまえは近いから、ボクの気持ちもわかるでしょ？」

わかりませんよ。他人なんですから。

きつと私は生涯、そんな子供っぽい空想に溺れることはないでしょう。

* * *

あの日、僕——『私』は、彼の子供っぽい空想を鼻で笑いました。

それでも他にすることもなかったし、当時の桃李くんは私より体格が良く暴力的で逆らうのが怖かったので、仕方なくそのお遊びに付きあつてあげました。

ねえ、私のほうがそんなあの子より大人でしょう？

夢や空想に溺れない、立派な大人の男でしょう？

あの日、疲れ果てるまで庭を駆け回った私たちは、最終的に『王冠が必要だ』と思い立って松ぼっくりやどんぐり、草の蔓などでそれらしいものをつくりました。

王子さまには、その身分を証明するための王冠が必要でしょう？

馬鹿馬鹿しくも薄汚いそのみじめな王冠は、あの日の思い出は、今でも朽ちていなければ私の実家の箆筒に仕舞いこまれたままでしょう。

* * *

「どうした、スオ〜？」

例によって例の如く、こちらに異様に顔を近づけて月永レオさんが問うてきました。

相変わらず他人との距離感がおかしいひとですね。

「ぼけ〜としてるけど……。どした？ 眠いのか？」

舌をだしたら届く距離で、私の尊敬する彼は慌てふためいています。

それが、何だか意地悪にも、誇らしい。

黄昏色の髪。無駄に飛び跳ねる元氣いつぱいの手足。

そんな彼が目の前にいるせいで、視界が微妙に判然としませんが――

我らの周囲は、さながら星空のよう。

基本的には暗闇ですが、舞台の照明や客席で輝くCyalumeが、我らが身にまとった豪華な衣装に反射して美しく煌めいています。

むしろ眩しくて、目が潰れそう。

視界がぼやけているのも、きつとそのせいです。

子供ではないのですから、感動して泣いちゃってるわけではないのです。

「何か妙な顔をしてるけど……。あれか、時差ボケとかか？」

レオさんはちいさいくせに年上のお兄さんぶって、こちらを心配そうに見てきます。

「体調悪いなら無理すんなよ、とも言えないのが申し訳ないけどな。明日にはもう、おまえらは帰国しちゃうわけだし」

ここは異国。季節は晩冬。

本来ならば凍てつくような寒さのなか、我ら『Knights』の『戴冠式』が催されています。会場の熱気で、むしろ今は汗ばむほどですけどね。

「だからまあ、がんばれ。踏ん張れ。しんどくても負けるな」

レオさんはこちらの頭をむやみに撫でて、無邪気に笑いました。

「倒れそうになったら、おれたちが支えてやるから」

大丈夫ですよ。

支えなど要りません。

私は子供のころからしつかりものでしたし、それから更に強く立派に成長したのです。

大事な大事な『戴冠式』で醜態を晒すような、不様なことにはなりません。

「ただだけ強いやつだつて折れちゃうこともあるよ。おれが証拠」

レオさんも感慨深いのか、遠い目をしていろいろ思い出している様子。

「だから、ほんとに無理そうだったらちゃんと見えよ。セナやリッツやナル、集まってくれたファンたち、誰がどんな文句を言ってもおれがそんなおまえを肯定する」

周りで歌いつづける仲間たちを見つつ、こつそり悪巧みするみたいに告げてきます。

「おまえを優先して、安全なとこまで逃がしてやるから」

何度も同じ主張をしますが、私は大丈夫ですよ。

ただ、さすがに感無量で夢うつつになつてしまい、すこし子供のころのことを思い出してしまいました。ぼうつとしていたのは、そのためです。

「子供のころ？ スオウはたぶん、子供のころからスオウって感じだったんだろかな？」

ええ。私は朱桜の子ですからね、今も昔も朱桜以外の何者にもなれません。

レオさんも、たぶん子供のころからレオさんって感じだったのでしょうね。

「いやあ、おれは今よりずっとアホガキだったけど！ わはは☆」

べつに褒めてないのに、何だか嬉しそうなレオさんでした。

「子供のころに出会ってたら、おれ、たぶんスオウに嫌われてただろうな。おまえ、馬鹿な子供は嫌いだろ？」

ええ。嫌いですよ。理性も品性もない子供は動物と同じです。

でも。そんなふう to 他人を見下す私にも、馬鹿な子供だったころはあったのです。

それを思い出しました。

その王冠を目の前にして。

「うん。『戴冠式』に合わせて急いでつくったにしては立派な王冠だろ。おれはよくわかんないけど、セナやリッツやナルはこういうの好きみたいで良い感じにつくってくれた」

レオさんはそう言つて、金銀細工で彩られた華麗な王冠を掲げます。

この厄介が過ぎた『王さま』は、その地位とともにこの王冠を私に授けてくれます。

それが『戴冠式』。

私たち『Knights』が、次の時代へ歩を進めるために必要な儀式。

「受け取れ。それをおまえが望むなら」

レオさんが実際、重たそうに掲げた王冠を、こちらの頭に添えてくれました。

「今は重たいかもしれないけど、たぶんそのうち馴染む。どうしても邪魔だったららべつに放り出してもいいしなく、おまえの気持ちや健康のほうが大事だ」

いいえ、喜んで受け取らせていただきますよ。

ちよつと笑つちやいますけどね。仰々しくて。

「それはおれも思う。誰だ、フィレンツェで『戴冠式』をやるとか言い始めたやつは」
私です。私が望んだことですよ、すべて。

地味で現実的な書類上の手続きだけでも、物事はつつがなく進むでしょう。

けれど。たまにはそんな味気ない現実には、砂糖菓子のような空想や夢、お遊びを混ぜてみるも良いのではないでしょうか？

「おつ、常に真面目なスオウらしからぬ物言いだな？ どうした？ ほんとに体調悪かったりしない？ 救急車呼ぶ？」

本気で心配してるようなので腹が立ちます。

でもまあ、当時の私ほどには——失礼ではないのでしょうか。

ねえ、見ていますか、桃李くん。

転げ回って泥まみれになって、同じ時間を共有した旧い友よ。

あの日、あなたを笑って本当にごめんなさいね。

こうして受け取ってみれば、これ「もなかなか良いものでした♪」

あんさんぶるスターズ!!
別冊セレクション

チェックメイト
CHECKMATE